

誰と学ぶか——自己・他者・コミュニティ

タイで学んだこと 人々との出会いから

中野穂積

1.

人は生まれる場所を選ぶことができない。産んでくれた人を母とし、その連れ合いを父として、両親が選んだ環境の中でその周りの人々と関わりながら育つ。地域の学校へ行き、学校の教師から両親から、地域の大人達から、まわりの環境から学んでいく。

遠くから運ばれた種もその場所が適当であれば、適度の温度と水分と養分、日差しがあれば、芽を出し茎を伸ばし、枝葉を広げて育っていくであろう。

生まれた時から成人するまで、同じ環境で育った人は、自分の周りの人々や環境に違和感を覚えることは少ないかも知れない。私はそうではなかった。私自身の事を語ろうと思う。

父の仕事の都合で、生まれてから5歳くらいまで転々とし、住む環境が変わり、友達や地域の大人達が変わった。5歳になった頃、定住した両親の郷里は自然に恵まれた美しい所だったが、友達や周りの大人の言葉が分からず、文化習慣の違いも感じてなかなか馴染めなかった。当時は今のように地方の子ども達も標準語に親しむという機会が少なかったせいもあるかも知れない。

私は幼い頃から、自分は異邦人であると感じていた。自分に馴染まない何かを押し付けられているような息苦しさを感じていた。仲良くなるのは他所から移って来た転校生や、年下の近所の子供達だった。転校生はいずれまた、他へ行ってしまうのだから、地元の同級生達と仲良くしなさい、と母から言われた。私は構わず、地元の子達と違う雰囲気を持った転校生と仲良くして、時には別れの寂しさを味わった。

私は本当は、何処かの誰かなのではないか、ここにいるべき私ではないのではないかと考えるようになった。

高校生になり、小さな集落ではなく、街で育った開放的な同級生や先輩達と交流するようにな

った。自分の研究対象に熱中し、あるいは生徒の内なるものを引き出そうと工夫を凝らす教師達に出会った。テニスコートや映画館、行動範囲も幾らか広がって行った。特に洋画鑑賞に熱中し、まだ見ぬ世界に憧れた。当時流行ったルーツという言葉に惹かれ、自分のルーツはと考えるようになった。

進学先は親が勧める親戚のいる京都や大阪は嫌だった。誰も知らない東京へ行きたかった。中央で自分を試してもみたかった。異文化を感じつつも面白さもあって、大学を卒業してからも 5 年を過ごしたが、人が多すぎて互いに無関心な都会の生活、満員電車で揺られ、往復 2 時間も掛けて会社に通う生活に虚しさを覚えるようになった。東京では頻繁に小さな地震があり、この都会で何かあった時、一人暮らしの自分は自分自身を助けられるのか。水道が止まったら、電気が止まったらどうなる。海も山もない都会で、食料は確保できるのか。次第に、ここでは自分らしい生き方は出来ないだろうと考えるようになっていた。ここではない、何処か、と再び考えるようになっていった。

2.

タイ人留学生との出会い、懐かしさが満面に溢れるような笑顔。梅棹貞夫著『東南アジア紀行』に描かれた、麓とは別世界のタイ山地民の暮らし。

新聞記事で知り合ったタイ農産物輸入業の間瀬氏は今まで全く出会った事のない、エネルギーと人懐っこさに溢れていた。1984 年 3 月、もし会社の休みが取れたら、チェンマイへ出て来ませんか？ちょうど日本からの来客案内があるので、と氏に誘われた。

こっちに間違いない。私は初めてパスポートを作り、格安チケットを手に入れ、バンコクへ、チェンマイへと向かった。空港の外の空気を嗅いで、初めての場所なのに、懐かしいと感じた。

多くの人に出会った。そして導かれて行った。出会うことによって謎が解けるように、今まで理解し得なかった事を理解した。そして自分が進むべき道を示されていったと思う。

最初に訪れたモン族の村は、チェンマイの街中からジープでたった 3 時間弱、山へ入って行っただけなのに、麓とは全く違った世界がそこに存在していた。人々は鮮やかな刺繍やパッチワークが施された民族衣装を纏い、カメラを向けると恥ずかしそうにはにかんだ。軒下には鮮やかなひだスカートが半円形にいくつも干されていて、まるで大輪の花が咲いたようだった。ここは桃源郷

かと思った。この人々は、私がその存在を知らなかっただけで、確かに同時代を生きて来たのだ、という事実には打たれた。

それはそこに存在していても、出会うという事が無ければ、私にとって、存在しない事と同じことになる。私が動くことによって、出会う事によって、私にとって存在する人々となったのだ。

最初のチェンマイ訪問で、農産物輸入業の間瀬氏の事務所で初めて谷口己三郎氏を紹介された。二度目のチェンマイ訪問で偶然にも谷口氏とチェンマイの市場で再会、声を掛けられた。その時、チェンライの農場へと誘われ、翌日チェンライへ同行した。

谷口氏は、鋼のような引き締まった容貌で、茅葺の竹の家に住んでおられた。信念を貫くというこんな生き方が、人には出来るのだという事を学んだ。定年退職後熊本から単身タイへ。農村青年教育の理想を掲げて、タイ北部で農場を開かれた。その理想の基礎となるのは、人口が増え続ける地球上の人類は、いつか食糧難に陥る。農産物の豊かなタイこそ食糧難から世界を守る砦とならなければならない、という信念だった。

その次の日、ラフの村を訪れる。ラフの人々の家は床も竹で出来ていて、歩くと竹が撓んでギシギシと音がした。昼食を出して頂いたが、冷えたご飯と味のないかぼちゃのスープがなかなか喉を通らず、同行の男性から早く食べてください、と急かされる。決して桃源郷ではない、と思い知らされた。

その帰り道、雨季の泥濘みにはまり込み、ピックアップ車が動かなくなった。男性達が荷台から降りて、車を押し始めた。谷口氏に「あなたは降りて来なくていいです、そこに乗っていなさい」と制されて車の荷台に乗っていたが、男性3人で押しても車は動かない。そのうち、彼らは私の体重の分まで押しているのだと気づき、車を降りて、膝まで泥水に浸かり、一緒に車を押した。動かなかった車が動いた。泥濘みを脱出する事が出来た。私は自分の殻を破る事が出来たと感じた。と同時に、その場に居合わせたラフの青年の私を見る目が、確かにその時から変わったのだった。その場を共有しなくては生まれない、理解と共感だったのではないか。

その後戻った東京の会社を1年足らずで退職して、1985年再び訪タイ。谷口氏が主催した熱帯農業研修に参加した。私以外は東京農大、北海道大学の男子ばかり5名だった。

茅葺の家、天秤棒を使っのの水汲み、炎天下での農作業、薪を使っのの炊事当番、煤だらけになるランプを使っのミーティング。まるでサバイバルゲームのようだった。谷口氏の隣の部屋で

休ませてもらっていた私は、氏が留守の夜、竹の床下から絶えず聴こえて来る、ガザガザという物音に悩まされ、なかなか眠れなかった。翌日その事を仲間達に告げると、同世代の手伝いの男性から、「床下に眠っている鶏達の動く音ですよ。そんな事では、この先山の村で生活出来るのかどうか」とからかわれた。

3.

1ヶ月の研修後、学生達は夏休みが終わるので、それぞれ帰国して行った。一緒に荒地を開き、土地を水平にして畦を作り、水を張って田植をした田圃の稲の成長記録は、その後私が写真に撮って、彼らに送る事になった。私自身はその後、研修中に見学した、モン族の村にあるロイヤルプロジェクトの開発センターで、お世話になる事が決まっていた。

ロイヤルプロジェクトとは、タイ国現国王の父、プミポン国王が1969年に山間地の少数民族の人々を訪問した事をきっかけに生まれた山地民の生活向上のためのプロジェクトである。当時山地民の多くが関わっていたケシ栽培をしなくても、他の換金作物で暮らしていけるよう、また移動焼畑耕作などで森林資源を破壊することのないよう、適性作物の研究と指導、市場開拓のために創設された。

ノンホイ村開発センターではその年1985年、スタッフが日本へ農業研修に向かう事が決まっていた、日本語を教えるボランティアとして、見学に訪れた私に目がとまったらしく、声が掛かった。

初めて訪れた時のノンホイ村は、暑い麓とは別世界で、ひんやりとした空気に包まれていた。モン族の人々の住む村で暮らす期待で胸がいっぱいになっていたが、手伝いの男性から言われてみると、ほんとうに大丈夫なのだろうかと不安な気持ちになった。

しかしそこでは皆から歓迎された。英語を話す農業指導のスタッフのお陰で、まだタイ語が解らない私も安心して、次第に皆と交流できるようになっていった。

言語の習得法はいろいろあるに違いない。会社勤めをしながら電車の中で繰り返し聞いたタイ語のテープ、知り合ったチェンマイの人々に手紙を書くために開いた日タイ会話集やタイ文字、文法を解説したテキスト。それらもいくらかの役には立ったが、開発センターでスタッフやワーカーの人々と生活を共にしながら、身につけて行ったタイ語会話は、自分が想像した以上に上達が早かった。その環境と文化の中で、繰り返し耳にするタイ語。状況と相手の反応を確かめながら学習

できるタイ語は徐々に自然に身についていった。それは赤子が言葉を習得する過程と同様のものではあったのだろうか。

開発センターに身を置く事によって、山地民の人々について少しずつ理解を深めていった。1985 年当時、タイ北部の山間地に居住する山地民は約 55 万人、代表的なタイの 10 の民族のうち、先住民はラワの人々のみと言われていた。300 年以上前から、ミャンマー側から移り住み始めたカレンの人々がいれば、つい最近タイ最北のメーサーイなどの国境を超えてミャンマーから移り住んだばかりのアカやラフの人々も居て、移って間もない人々は当然ながら、タイ国籍を持っていなかった。

チベット東側を発祥の地とするアカ、ラフ、リスの人々は、移動焼畑耕作を続けながら山伝いに中国、ミャンマーを経てタイに移動。あるいは軍の使役や兵役から逃れてミャンマー側からタイに入った。ラオス側からタイに移ったモンやミエン(ヤオ)の人々もいる。それぞれ独自の生活文化と言語を持ち、共通語を主にラフ語としながら、多言語を使いこなす者も多かったらしい。

山地民の人々から学んだ事は多い。衣食住を自らの手で支える自立した生き方。泥濘む道も行き合ったもの同士が最後まで、全ての車が災難から脱出するまで協力し合う姿。違った言語、文化を持ちながら、常に隣人として存在する他民族との共生の智慧。

特に初めてタイに居住を始めた 1985 年当時、タイの人々の慈悲の心や寛容さはあっても、日本人に対する風当たりはまだまだ強かった。第二次世界大戦当時タイに進出して、ミャンマーへの道路や鉄道を作った頃の日本軍の行いを恨む人々もいた。軍事侵略の後には、経済侵略かと、日本製品ボイコット運動が起こった後でもあった。

しかし、山地民の人々の、日本から 1 人でやって来た若者への接し方は、それとは違ったものがあった。インパール作戦に敗れてミャンマーとタイの国境をさまよった日本兵を保護し、家族同様に 7 年も一緒に暮らし、その後村で亡くなった日本兵の話をしてくれた老いた蒙の女性は、彼は正直でよく働く人だったと言った。隣の村のモン族の年配の男性に日本語で話しかけられ、驚いたこともある。昔、中国にいた頃、日本軍キャンプで料理番をしていたそうだ。豚肉、鶏肉と、覚えている日本語を懐かしそうに披露してくれて、酷い話は一切しなかった。

その後会ったリス族の男性からは、武器も食料もないところで、竹槍や落とし穴を作って懸命に戦っていた日本人は賢く忍耐強い民族だと聞かされていた、と語ってくれた。それは 1 人で日本

からやって来て間もない、タイ語もまだ自由に操れない者にとって、どんなに救われる思いがしたことか。更に日本人として、彼らに返さなくてはならない恩があるのではないかと思い始めていた。タイに居住する同じマイノリティとして、異邦人として、私は彼らに共感し、その強さ、優しさに惹かれていった。

1987 年 5 月、谷口氏からの誘いによって、リス族の中学生のための通学用寄宿寮、リス生徒寮を設立。茅葺のバンブーハウスの宿舎と食堂、井戸とトイレだけで始めた生徒寮活動は、その後全ての山地民の中学生から大学生までを対象とする奨学金制度、第二寮暁の家へ、山間地に生まれた保育園支援へと引き継いでいく。

谷口氏との交流、師弟関係はその後 2011 年 12 月、氏がその生涯を終えるまで続いた。氏によって稲作や養豚ばかりでなく、信念を貫く生き方がある事を学んだ。

4.

山地民の人々と学び合う関係は続いている。

2008 年から東京の NPO と協働という形で始めたコーヒーでタイ山地民の生活向上、というプロジェクトで、山間地の人々と共に有機でのコーヒー栽培について学び、2011 年、暁の家で生徒たちと育てたコーヒー苗木 5,000 本をその他の果樹と共に、スタッフの家族から借り受けた山の畑に植える。苦難を経ながらも有機でコーヒー栽培が可能な事を証明、契約の終わる今年 3 月に、15 年間借りた畑をそのまま返還する予定である。

コーヒー以外には、ラフの人々の提案により、アボガド栽培について、特にその挿し木の技術について共に学んだ。今ではコーヒー、スモモ、バナナに続いて、アボガドはラフの人々の主要な換金作物となっている。山間地における持続可能な生活、生産活動を守るため、共に植林活動、防火帯作りもした。

今、力を入れたいと思っている活動は、それぞれの民族の伝統文化の継承である。音楽、踊り、遊び、手仕事など、共に楽しみながら、次世代に受け継ぐ活動を実施していきたい。その価値を次世代に、他者に知ってもらう事、織や刺繍、パッチワーク、草木染め等、手仕事による製品の市場開拓も重要と考える。

40 年を経て、タイで歳を重ねた私に出来る事は何だろうか。その体験、見聞きした事、考えた

事を日本から訪れる若い人々に語ること。そしてその場に、山間地に案内して実際に会ってもらう、ということではないだろうか。出会い、理解し、共感することで、平和な共生の輪が広がっていくのではないだろうか。

長く活動が続けたことで、昔学生の頃、スタディーツアーで訪問してくれた人の娘さんが研修生として来てくれるようになった。今の活動をスタッフとして支えてくれる生徒寮の卒業生たちもいる。

コーヒー農園での作業の帰り道、風に吹かれながら、ふと思った事がある。今日も一日無事終わったと思う充実感。苦労と思える山間地の生活を、人々が捨てないその理由が、少しわかったような気がする、と。

(中野穂積 なかの ほずみ ルンアルン暁プロジェクト代表)